

ちまんづよい子

倉橋惣三

「夏中お障りありませんで、」

「今年も随分お暑うございましたね。しかし、戦地の兵隊さん方のことを思ひますれば、」

「ぼんとですよ。どんなに御苦勞でせうねえ。それにしても、日本兵の強いにはわれながら感嘆の次第ですわね」

「全く。どうして、こんなに強いのだらうと思ひます位で、」

「からだは敵より大きい譯でもございませぬし。一體なぜなんでございませうねえ。そりや、精神は申すまでもないんでございませうが」

「どうですわねえ。精神、日本精神から出ることとは勿論なんですが、つまりはがまんづよいのですわね」

「がまんづよいのでございませぬ」

「強い、精神にしても身體にしても、強いといふことに、分ければいろいろあります。一氣に強いのと、ちりちりと長つゞきする強さと、この二つに分けられませうね」

「根氣強いといふので」

「そうぞ、あれなんか、つまりはがまんづよいで、」

「強さ、あれなんか、つまりはがまんづよいで、」

「強さ、あれなんか、つまりはがまんづよいで、」

「強さ、あれなんか、つまりはがまんづよいで、」

「強さ、あれなんか、つまりはがまんづよいで、」

「強さ、あれなんか、つまりはがまんづよいで、」

「強さ、あれなんか、つまりはがまんづよいで、」

「強さ、あれなんか、つまりはがまんづよいで、」

「強さ、あれなんか、つまりはがまんづよいで、」

「強さ、あれなんか、つまりはがまんづよいで、」

「強さ、あれなんか、つまりはがまんづよいで、」

「強さ、あれなんか、つまりはがまんづよいで、」

「強さ、あれなんか、つまりはがまんづよいで、」

「強さ、あれなんか、つまりはがまんづよいで、」

母親の健康

東京 西田町幼稚園長

坂内ミツ

何人でも健康を保つ事の大切な事はいふまでもありませんが、母親は別して健康でなければなりません。自分の身體が自分一人のものであるならば、勝手な生活をして健康を害した處で、自分だけ苦しい思ひをすれば濟むのであります。母親の身體は決して自分一人のものではありません。國家の大母だからである子供を育てる大責任を負つて居るのです。それはかりでなく國家の一分子である一家を治め、主人をして又家人をして各々職務に眞剣に働かせる原動力とならねばならぬからであります。殊に幼児を育てて居らるゝ母親は特に考へていたゞかねばなりません。幼児の心身と母親の心身とは實に未分化なもので混然一體であるといはねばなりません。即ち母親の身體の強弱、意志感情の動きは忽ち子供に影響して其及ぼす處は非常に大きいものがあります。萬一母親が健康を害したとすれば自然不愉快な表情になりますので、子供も頭かになり得ません。激烈と遊ぶ事が出来ません。母親が病氣であれば食事の上にも注意がとゞかす。榮養も不充

道を一寸のぼると、すぐ、もう歩けないと申すのです。私は、さうか、と申しても可愛そうだからといふ甘さだけではありませんが、無理に疲れさせても存じて休ませようと思すと、主人が、いえ、もう少し歩け、がまんして、と申しては、いつも少しづつ歩かした後休ませました」

「それ、それがいゝのですよ、そこが肝心なところですよ。御主人の方が教育家です」

「そうでございませうか。實は、私が疲れをまましてホ、ホ、」

「ハ、ハ、ハ、それや教育問題以外ですね。しかし、とにかく、さういふ風になさると、だん、だん力が増してゆきませう」

「さようでございませう。仕舞には、もう休むかねと申しますと、もう一寸が、ま、んしてからと申しますんです。が、ま、んが、樂しみなように」

「それでなくちやいけませんね。楽しみになるのでなくしては」

「體に無理は起りますまいか」

「大丈夫ですよ。出来るがまんしかがまん出来るものぢやありませんから。つまり、いつもは、出来るがま、んをがまんしないのでね」

「日本の兵隊さんも、ほんとにがまん強いのでございませうね」

「そうですね。そこが米兵の生白い兵隊と違ふところですよ」

「さようでございませうね」

「あなたのお子さん、どうです。がまん強くやりますか、なんでも」

「それが、どうも、あんまり」

「あんまりつて、幼い子ですから、さう強くも鍛えかねますがね。少しづつでも段々がまんの癖をつけなければいけません」

「癖を」

「そうですね、がまんする癖をだん、だん、養つてゆくのです。今、日本で一番入用なのは困苦缺乏に耐へて激しい戦をする力と、

その長い銃後の苦闘に耐へ通すことですからね。就ては、皆、自分の子をそのがまんの癖をつけて置かなければなりません。」

分となり胃腸をそこね風邪にかゝる事が多いのは當然な事でありませう。かく大切な母の健康でありますが母親の仕事は非常に多く、殊に昨今の生活様式では母親の仕事は想像以上に多くなつたので休息する暇がなく疲勞する事が多い事は注意せねばならぬ事でありませう。こうした時に當りて尙ほよく健康を保つにはどうしたらよいでせうか、私自身の體験から申せば、常に心を單純に持つ事でありませう、即ち人の言ふ事は其まゝ信用して決して疑を挿まない。又決して其かげに潛んで居る意味などを忖度しませぬ。自分の言ふ事も心にあるものを其まゝ發表するの

で人によつて言葉をかへたり、時によつて言葉が合はないかなど、心配する必要はなく、いつも呑氣で單純ですから、神經を不必要に使ふ事がないのが健康を保持する第一の條件だと思ひます。尙ほ一つ、大切な事は自分の骨格を知つて置く事です、男性型の人でも女性型の人でも自分の型を知つておいて、其型に合ふ運動をして居れば健康を保つて居られます。それにしても其型にさからう運動しなければならぬ事もあるので就床の前に軽い運動をして其無理に使用した部分を調節するやうにすれば、床につくやうなことはないと思ひます。